
Knight in night ~ **それでも世界を愛すのか？** ~

AvEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Kn i g h t i n n i g h t ｝それでも世界を愛すのか？

【Nコード】

N7130Y

【作者名】

A V E I

【あらすじ】

イルミネ学園普通科二年、【暁さくや】は住み慣れない土地で二回目の春を迎えようとしていた。

個人が持つ魔導ランク重視の『魔導科学社会』において、（最低）ランクGを持つさくやを待っていたのは、激しい拒絶と暴力だった。それでも、誰に弱音を吐くこともなく耐えてこれたのは、『最愛の姉』があつてこそだった。

これは一人のシスターコンプレックスな青年が、矛盾に満ちた世界を駆け抜ける そんな物語。

携帯で見るとは、本文改行二倍推奨です。

本文はリズムを崩さないよう書きませんが、感想、指摘、改善点がありましたら宜しく願います。

プロローグ

00

もし【あかしき暁さくや】について語ることがあるとすれば、彼は極度のシスターコンプレックスであると言うことだけだ。

彼の原動力は『姉』の存在であり、学園の成績もその目立たないようにしていた性格も、全ては姉に迷惑をかけぬようと心掛けていたものだった。

『魔導ランクA』で国立魔導研究所に勤務する優秀な姉に対して、『ランクG』という事実上魔力が無い彼に出来ることと言えばそれくらいしかなかったからだ。

神様はとても残酷で、平等過ぎると彼は思っていた。

血の繋がっているはずの姉弟にも関わらず、先天的な能力が天と地程差があったからだ。

『人間は産まれた時から平等じゃない』

それを知っていた彼は、せめて姉の汚点とならないように努力を重ねた。

『魔導科学社会』に置いて、魔導ランクはほとんどそのまま社会的地位になる。

この国を含め、平等と謳っている全ての国の上層部は全員優秀な魔導ランクを持っている貴族たちばかりだ。

神様は平等だ。

公平にサイコロを振っているに違いない。

だから何が言いたいかっていうと、こんな卑屈に卑屈を重ねた思考を持つ青年【暁さくや】を語るのは、本人たる俺からしてみても、

なんと言つか意味なんて無いんだと思う。

ただひとつだけ言いたいことがあるとすれば、俺自身は誰もが世界史で学ぶ『次元大戦』を最終に導いた『勇者』であったり、それと対をなした『魔王』や『魔神』じゃないってことくらいかな……。

だからこれから語るのは、誰にでもあるような話。

もしかしたらこれを語っているのは、今読んでるあんだだっただかもしれない　サイコロを振っている神様から見れば、あんだだっただけだっただけそう大差は無いはずなのだから……。

l o g - o u t ……

第一話

01

世界は矛盾で満ち溢れている。

嘘じゃない

そんな不満を抱えながら俺
暴力に身を任せていた。

【あかじき暁さくや】は絶えることのない

薄汚れた狭い路地のコンクリート壁は、鈍い音でもよく反響させる。

背中から両腕をホールドされ無理やり立たされている俺の体力は、
とっくに限界を越えていた。

今は呼吸をするだけでも辛い。

「死ねや!!」

とかなんとか言って、どうせ殺す勇氣なんて無いんだろ……

口先だけの威勢のよさに俺が頬を釣り上げると、口元から生暖かい液体が頬を伝った。さっき顔を殴られた時からだろう

鉄独特

の味が口に広がっている。

下校する時まで真っ白だったワイシャツが、いつの間にか黒と赤が禍々しく彩っていた。

全身が苦痛で悲鳴をあげていたが、声を上げるわけにはいかなかった。

こうなることは予想出来たはずなのに、どうして自分は大人しく“あいつ”を待っていなかったのだろうか？

まあ、今更悩んでも仕方がない

皮肉れた自分に自嘲し、我慢していた笑みが思わずこぼれた。

「つ、てめっ!!」

顔を伏せていたにも関わらずそれが見えたのだろうか、相手の暴力の激しさが拍車をかけて増した。さっきより重い拳があばらに響いた。

「あ……」

垂れ下がっていた視線を少しだけ持ち上げたが、分かったのは先輩達の怒りがおさまりそうにないことだけだった。

今日もまた別の人達みたいだ

今日で何人目になるだろうか。

同学年からの暴力がこの一年で減ったのは事実だ。

でも、俺を疎ましいと思っっているのが同い年とは限らないことも事実だった。

何度も殴られた腹部は、自衛機能を発動している。意識もしてな

いの筋肉が硬くなっていた。

そりゃ、一時間も殴られれば、そうなるか……

殴られ続ける中、俺は妙に他人行儀だった。慣れというものはい、さつさと気絶してしまえば楽になるのに……。

振りかぶった勢いのいい右フックが急所である溝内を直撃したというのに、もうあまり痛みは感じない。

いつまで続くんだろう……と、麻痺してきた感覚にうんざりしてきた。

「おい！何してんだ！！」

狭い路地なので、感覚が麻痺しかけている俺にも、その声はよく耳に届いた。

「やべっ、逃げるぞ！」

突然、名前はおろか、顔すら知らない『普通科』の先輩達の暴力が終わりを迎えた。

自分の保身の危機を感じたのか、俺をいたぶっていた先輩達は、地面に置いていた自身の鞆を拾い上げ、逃げるように去っていった。暴力から解放された代わりに、支えを無くした俺は力なく膝をつき、次いで仰向けに倒れた。

冷たいコンクリートが内出血で火照った身体を冷やしていく。気持ちがいい。ここで意識を手放せば心地いい夢の世界に旅立てる気がした。

きつと血溜まりの中で漂う夢になるだろう。

「警察呼ぶか？」

頭に直接響く音声に、重くなった瞼を仕方なく持ち上げると、革靴が目飛び込んできた。靴には細かい傷がいくつもついていた。

「いらねえよ……」

お姉ちゃんに心配をかけるようなことはしたくない。

俺は声をかけた男にそう言いつつ、軋きむ両腕でボロボロになった身体をなんとか持ち上げる。

「つっ……」

力を入れた場所が激痛を帯び、小さく呻き声を漏らしてしまった。立ち上がるのは諦め、身体を捻り上半身だけ起き上がると声をかけた赤髪の顔がそこにあった。

「だから、待ってるって言ったのに」

俺の惨状を見て、悪友【ケイ・インターラル】は小さく溜め息をついた。

しゃがんでいたケイが立ち上がると彼の短い前髪が小さく揺れた。いつもなら待っているのだが、今日は理由わけがあった。それは俺にとって全てに優先される。

早く帰って部屋を掃除したい

明日はお姉ちゃんが帰ってくる予定なのだ。

「立てるか？ シスコン」

そう言っで自力では立てないでいる俺に、ケイは右手を差し出した。

「地の文読むなよな……」

俺が右手を差し出すとケイは、「何言っでんだ？ お前」と笑いながら、力任せに引っ張っでくれた。

「で、なんで待っでてくんなかったんだよ？」

俺に肩を貸すケイが、近くに転がっでいた俺の鞆を拾い上げた。

「補習になっでた奴を待っでやるほどできでないんだよ、俺は」

口に溜まっでた血を路地に吐き捨てた。

やっぱり切れてやがる。当分、辛いものは厳禁になりそうだ。

「じゃ、これは俺を置っでいっでた天罰だな、きつと」

「これからは待っでてるよな」と、複製音が付きそうなのケイの台詞に互いの笑みをこぼした。

狭い路地を抜けると、風に流された桃色の欠片が視界の隅を通り過ぎた。

俺達を迎えてくれた街路樹の桜が、真上から降り注ぐ暖かい光で一層輝っでいた。

また、長い一年が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7130y/>

Knight in night ~それでも世界を愛すのか?~

2011年11月21日12時12分発行